資料３

国語科（言語文化）学習指導案

指導者　＊＊＊＊

一　日　時　令和＊＊年＊月＊日（＊曜日）　第＊限（50分）

二　学　級　第一学年＊組（＊名）

三　単元名　古典の格言で随筆を書こう

四　単元の目標

（１）古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。（〔知識及び技能〕（２）のウ）

（２）自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にできる。（〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ「書くこと」（１）のア）

（３）言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（学びに向かう力、人間性等）

五　取り上げる言語活動と教材

（１）言語活動

古文を読み、自分の体験の中から類似する題材を決め、表現したいことを明確にして随筆を書く活動。（〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ「書くこと」（２）のアを参照）

（２）教材

・「ある人、弓を射ることを習ふに」（第九十二段）「高名の木登り」（第一〇九段）「双六の上手」（第一一〇段）「吉田と申す馬乗り」（第一八六段）

※『徒然草』より、いずれも表記を一部読みやすく改めたものを使用する。

六　単元の評価規準

（１）古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。（知識・技能）

（２）「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。（思考・判断・表現）

（３）作品と自身の体験をつなげて随筆を書く活動を通して、自らの文章表現を工夫したり、表現を推敲したりしながら学習課題に沿って粘り強く取り組んでいる。（主体的に学習に取り組む態度）

七　指導観

（１）単元観

古文学習の初期に行う単元である。言語文化を担ってきた古文作品と自身の体験との共通点を考えることで、今後学習する古典の世界に親しむ態度を養うことができる。グループワークを通して、古文のまま大まかに内容を理解する体験をさせ、自分で読んだという達成感も得させたい。

（２）学習者観

古文に対して若干の苦手意識を持つ生徒がいる一方、話し合いなどは積極的に取り組め、自由な発想や発言が見られるクラスである。

（３）教材観

高校で本格的に古文を学び始めた時期の生徒にとって、助動詞などの基本的な文語のきまりが学習しやすく、書かれた内容についても、把握しやすい。自身の体験に引きつけて随筆を書くことで内容の理解を深め、さらに作品を相互に鑑賞しあうことで、言語文化に親しませることができる。

八　単元の指導計画（配当時間５時間）

次 時間	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点	評価上の留意点 ◇観点　□点検・確認■分析

資料３

		＊生徒への支援の手だて	＊「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第１次 ２時間	・「ある人、弓を射ることを習ふに」（第九二段）を読解する。	・前単元で学習した用言の活用について復習し、初出の助動詞について文法的意味を解説する。	◇（知） □「記述の点検」（ノート） ＊副教材の該当箇所を示し、参照させる。
第２次 １時間	・「高名の木登り」（第一〇九段）、「双六の上手」「第一一〇段」、「吉田と申す馬乗り」（第一八六段）の読解。 ・それぞれの段で兼好が取り上げている「戒め（教え）」は何か考える。	・適宜現代語訳の入ったワークシートを配付し、グループであらすじを考えさせる。 ＊文法事項で誤読している場合は、文法書や辞書を使うよう指示する。 ・兼好が「その道の名人」の言葉を興味をもって記録していたことに気付かせる。	◇（知）（態） □「記述の点検」（ワークシート） ＊よくできているグループのワークシートを撮影し、共有できるようにしておき、詰まった生徒に随時参照させる。
第３次 １時間	・前時のグループワークの読解内容を確認する。 ・「ある人、弓を射ることを習ふに」をもとに、本単元の随筆の型を学ぶ。 ・随筆を書く。 ・推敲の要点を理解する。	・前時の活動で、誤読していたグループがいた場合はここで修正する。 ・第一段落で選んだ名人の格言を要約し、第二段落で自分の体験を書くように指導する。 ・書き終わった生徒から推敲させる。 ・タブレット端末で随筆を作成し、提出する。	◇（思） □「記述の確認」（ワークシート） ＊部活動などでの体験を箇条書きにさせる、ペアで話し合うなどアイデアを出させる。 ◇（思） □「記述の確認」（提出した作品）
第４次 １時間	・各作品を読み比べ、各自が良いと思った作品に投票する。 ・他者の作品を読んだうえで、自身の作品について自己評価をする。 ・自分の作品を再度読み直し、修正して提出する。	・作品の提示にはＩＣＴ機器を使用し、生徒はタブレット端末を通して相互評価および自己評価を行う。 ・優秀作品について、ペアで簡単によかった点を話し合う。 ・自分の作品を再読し、必要ならば修正して提出する。	◇（思）（態） ■「記述の分析」（提出した作品） ・提出作品および自己評価表をルーブリックにより分析する。 ＊相互評価表から、推敲するポイントを見つけることができるように声をかける。

九　本時の具体的な目標

教材の内容に沿った題材を選定し、構成を考えて随筆を書く。

十　本時の具体的な評価基準

教材の内容を理解し、自分の体験に近づけて随筆を書こうとしている。

十一　本時の指導（全５時間中の４時間目）

資料３

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入（５分）	・本時の学習内容を理解する。	①単元の目標と言語活動について確認する。	①自分の体験を随筆に書くことを理解させる。
展開①（10分）	・前時の読解内容を確認する。	②前時の読解が間違っていないか確認する。	②回収したワークシートのうち、よくまとまっていたものを教師用タブレット端末で撮影し、共有する。間違った読みをしていたグループがいた場合はここで修正する。
展開②（30分）	・随筆を書く。 ・書き上がった人から推敲する。	③随筆を書く。 ・読解した四つの段のなかから一つ選び、第一段落で要約する。続く第二段落で自己の体験を書く。 ④書きあがった文を各自で見直し、文の構成にねじれがないか、わかりにくい文になっていないか推敲する。 ⑤推敲の要点に沿って推敲し、作品を提出する。	③なかなか書き出せない生徒がいた場合、部活動や課外活動などでの体験を書き出させたり、隣同士で簡単に相談させるなどする。 ④主語と述語が対応しているかどうか、修飾語の位置は適切か、などの要点を理解させ、書いた文章は必ず読み返すようにさせる。 ⑤タブレット端末から「推敲のポイント」資料を取り出し、推敲の要点に沿って推敲させる。
終結（５分）	・本時の内容を振り返る。	⑥次時はそれぞれの作品を読み比べることを確認する。	⑥時間内に書き上がらなかったものや、もう少し推敲したい生徒は、家庭学習とする。 ■書き上がった作品を「記述の分析」により評価する。

十二　ルーブリック

※教師用

観点	A	B	C
題材の選定と文章表現（思考・判断・表現）	自分の体験の中から『徒然草』の内容と関連する適切な題材を選定し、的確に伝わるように表現を工夫して随筆を書くことができる。	『徒然草』の内容を理解し、自分の体験と関連づけた随筆を書くことができる。	『徒然草』に書かれている「戒め」や「教え」と、自分の体験とを結びつけて随筆が書けていない。
言語知識（知識・技能）	文の順序や文体など、内容に合わせて分かりやすさを考えた文章である。	文の構成にねじれがなく、分かりやすい文章である。	文の構成が適切でなく、文意を理解することが難しい。

資料３

※生徒用

観点	A	B	C
名人の格言集について、あらすじをだいたい理解することができたか。（知識・技能）	自分の力である程度理解することができた。	間違っていた部分もあったが、グループの話し合いで自分の読みを修正できた。	全く理解できなかった・相談してもあまり理解できなかった。
自分が書いた随筆の内容と、「徒然草」の名人の格言をつなげることができたか。（思考・判断・表現）	『徒然草』の格言と体験を自分なりにうまくつなげられた。	自分の体験は書けたが、『徒然草』とつながりがあるか分からない。	何を書いたらよいか自力で見つけられなかった。
読み手を意識し、分かりやすく伝わりやすい表現で書くことができたか。（主体的に学習に取り組む態度）	自分なりに工夫して表現できた。	ポイントに従って推敲したが、修正しきれなかった。	どこをどう直せばよいのか分からなかった。

十三　御高評

一年　言語文化　徒然草でエッセイ①

（　　組　　番・氏名　　　　　　）

◆徒然草には、「ある人、弓射ることを習ふに」以外にも、その道の名人の言葉を書き留めた章段がみられます。名人の「戒め」「格言」を、自分の体験に取り入れて、随筆を書いてみましょう。

活動１　「徒然草」に出てくる名人の格言を読み取ろう。

※グループに分かれ、「あらすじ」と、そこに書かれた「戒め」・「格言」をまとめてみましょう。
学習済みの助動詞は、文法の意味を確認しましょう。

①「高名の木登り」（一〇九段・一部）

高名の木登りといひし男、人をおきてて（**指図して、**）、高き木に登（のぼ）せて梢を切らせし（**過去**）に、

いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、降るるときに、軒たけばかり（**軒の高さくらい**）になりて、

「あやまちすな。心して降りよ。」とことばをかけ侍りしを、「かばかりになりては、

飛び降るとも降りなん。いかにかく言ふぞ。」と申し侍りしかば、「そのことに

さうらふ。目くるめき、枝危ふきほどは、己が恐れ侍れば申さず。あやまちは、

やすき所になりて、必ずつかまつることにさうらふ（**必ずいたすものでございます。**）。」と言ふ。

あやしき下臈なれども（**身分の低い者ではあるけれど、**）、聖人の戒めにかなへり。

あらすじ

木登りの名人の「戒め」とは

資料３

② 「双六の上手といひし人」（一一〇段・一部）

双六の上手（双六の名人）といひし（過去）人に、そのてだて（方法）を問ひ侍りしかば、「勝たんとうつべからず。負けじ（打消意志）とうつべきなり。いづれの手か（どの手が）疾く負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりともおそく負くべき手につくべし。」といふ。

注・この時代の双六は、一対一で行う対戦ゲーム。博打にも使われた。

> あらすじ
>
> 双六名人の「格言」とは

③ 「吉田と申す馬乗り」（一八六段）

吉田と申す馬乗りの申し侍るは、「馬ごとにこはきものなり（**馬はどれも手ごわいものだ。**）。人の力争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をば、まづよく見て、強き所、弱き所を知るべし。次に、轡（くつわ）、鞍（くら）の具に危き事やあると見て、心にかかる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意を忘れざるを馬乗りとは申すなり。これ、秘蔵のことなり。」と申しき。

> あらすじ
>
> 馬乗り名人の「格言」とは

資料３

一年言語文化　徒然草でエッセイ②

（　　組　　番・氏名　　　　　　）

活動２　自分の経験に近づけてエッセイを書こう。

①「ある人、弓射ることを習ふに」「高名の木登り」「双六の上手」「吉田と申す馬乗り」の中から、一つ題材を選ぼう。

②これまでの自分が「成功した」／「失敗した」体験の中から、「名人の戒め・格言」が当てはまると思う場面を挙げてみましょう。

いつ　・　どこで　・　どんな状況　⇒　どの格言が当てはまる？

資料３

③実際に書いてみよう。
最終的な提出はタブレット端末上で行います。
※形式段落の構成は、「ある人、弓射ることを習ふに」をまねてみよう。
一段落目 「徒然草」のどの章段を選んだか分かるように、簡単にあらすじをまとめる

ある名人は、「

」といった。

この戒め、万事にわたるべし。

※一段落目の最後は「この（戒め・格言）万事にわたるべし」とする
二段落目 自分の体験をつなげて述べる

※「ある人～」の場合、兼好が自分の「仏道修行」体験を書いていた部分。

④推敲しよう。（書けた人から順番に）
※必ず読み直すこと！
誤字や脱字の確認 → 変換ミスもチェック！
文章構成の推敲 → 文の順番を入れ替えてみるなど。
文自体の推敲
・悪文（意味が取りにくい文）になっていないかチェックしよう。
文体も「持ち味」の一つですが、砕けすぎないように。
⑤提出

締切　　月　　日